

倉石土地区画整理事業地内
埋蔵文化財発掘調査報告書 Ⅱ

牛頸屏風田遺跡

大野城市文化財調査報告書

第46集

1995

大野城市教育委員会

倉石土地区画整理事業地内
埋蔵文化財発掘調査報告書 Ⅱ

びょう ふ た
牛頸屏風田遺跡

大野城市文化財調査報告書
第46集

1995

大野城市教育委員会

序

本市南部の牛頸・上大利地区には、須恵器を焼いた窯跡がたくさんあり、牛頸窯跡群として全国的にその名を知られています。その一方で、福岡市に隣接している本市では、人口の増加が続いており、窯跡などの遺跡がある場所が次々に開発され、住宅地に変貌している状況です。そこで、牛頸地区では、乱開発を避けるために、平成2年から倉石土地区画整理事業を行ってまいりました。本市教育委員会ではこの事業に伴って多くの埋蔵文化財を調査いたしましたが、本書はその2冊目の調査報告書です。

本書では主に、古墳時代と中・近世の遺構の報告を行っています。とくに中・近世の遺構は、牛頸地区の歴史を考える上で、貴重な発見でした。

現在、遺跡の姿を見ることはできませんが、本報告書によって牛頸地区、ひいては北部九州の歴史の一端が明らかになれば幸いです。

最後になりましたが、調査費の負担をはじめとして終始多大なご協力を賜りました倉石土地区画整理組合、地元牛頸区の皆さん、種々のご協力をいただいた工事関係者の皆さん、指導、助言をいただいた関係者各位に対しまして心より感謝申し上げます。

平成7年12月25日

大野城市教育委員会

教育長 堀 内 貞 夫

例 言

1. 本書は、大野城市倉石土地区画整理組合（理事長 田中 繁）より委託を受けて福岡県大野城市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査の記録である。
2. 遺物写真は、岡紀久夫の撮影による。
3. 遺物実測は、岸野和子、岡田裕之が、製図は岸野和子と河鍋洋子が、拓本は井手美智子が担当した。
4. 出土遺物については、小破片であったり風化の著しいものは図示しなかった。
5. 本書の執筆・編集は、徳本洋一が担当した。
6. 本書に掲載した地形図には建設省国土地理院発行の2.5万分の1『福岡南部』・『不入道』を使用した。

本文目次

I. はじめに	1
II. 調査の結果	6
1. 調査概要	6
2. 検出遺構と遺物	6
(1) 不整土坑 (SX)	6
(2) 土坑	8
(3) 溝状遺構	13
III. まとめ	15

表目次

表1. 牛頸周辺遺跡地名表	4
---------------------	---

図版目次

図版1	(1) A区全景
	(2) B区全景
図版2	(1) C区全景
	(2) SX01
図版3	(1) 1号土坑
	(2) 2号土坑
図版4	(1) 溝01
	(2) 溝02
図版5	出土遺物

挿 図 目 次

第1図	牛頸周辺遺跡分布図（1／25,000）	折り込み
第2図	位置図（1／10,000）	折り込み
第3図	遺構配置図（1／300）	3
第4図	S X 01実測図（1／60）	7
第5図	S X 02・03実測図（1／60）	8
第6図	1号土坑実測図（1／60）	9
第7図	2号土坑実測図（1／60）	11
第8図	3号土坑実測図（1／60）	12
第9図	4号土坑実測図（1／60）	12
第10図	溝01・02断面図（1／60）	13
第11図	出土遺物実測図（1／3）	14

I. はじめに

本書は、大野城市倉石土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書の第2集である。

大野城市倉石土地区画整理事業は、総面積19.7haに及ぶ事業で、平成2年12月7日に組合が設立され、平成3年2月27日に起工式がとり行われた。現在、事業は順調に進んでおり、かつては水田であったところに道路が敷設され、住宅が次々と建ち並び、新しい街が生まれつつある。

この区画整理事業に先立つ平成元年度に事業範囲内の試掘調査を行い、その際遺構が確認された部分については、平成3年度から平成5年度まで発掘調査を行った。その経過を箇条書きにまとめると、以下の通りである。

○平成元年度の調査

試掘調査 平成2年2月

○平成3年度の調査

塚原遺跡 平成3年4月～平成4年2月

○平成4年度の調査

屏風田遺跡 平成4年7月～8月

塚原遺跡 平成4年8月～平成5年1月

○平成5年度の調査

屏風田遺跡 平成5年5月～8月

調査に際しては、事業主体者である大野城市倉石土地区画整理組合、工事施工者の皆様、大野城市区画整理課、地元牛頸区の皆様から多大なご協力を頂いた。また、関係各位からは多くの指導・助言を頂いた。ここに厚く感謝の意を表したい。

平成元年度以降、平成7年度にいたるまでの本市の調査体制は以下の通りである。

教 育 長	久 野 英 彦
	堀 内 貞 夫
教 育 部 長	末 増 治
	池 田 嘉 門
	香 野 信 儀
社 会 教 育 課 長	岡 部 弥之助
	關 隆 昭
	赤 星 健 彦
社会教育課長補佐・係長	青 木 克 正
	白 水 岩 人

庶務担当主事・主査

調査担当技師

同 嘱託

中 村 茂

高 橋 裕 司

浦 山 敏 弘

吉 田 悟

舟 山 良 一

向 直 也

徳 本 洋 一

石 木 秀 啓

岸 野 和 子

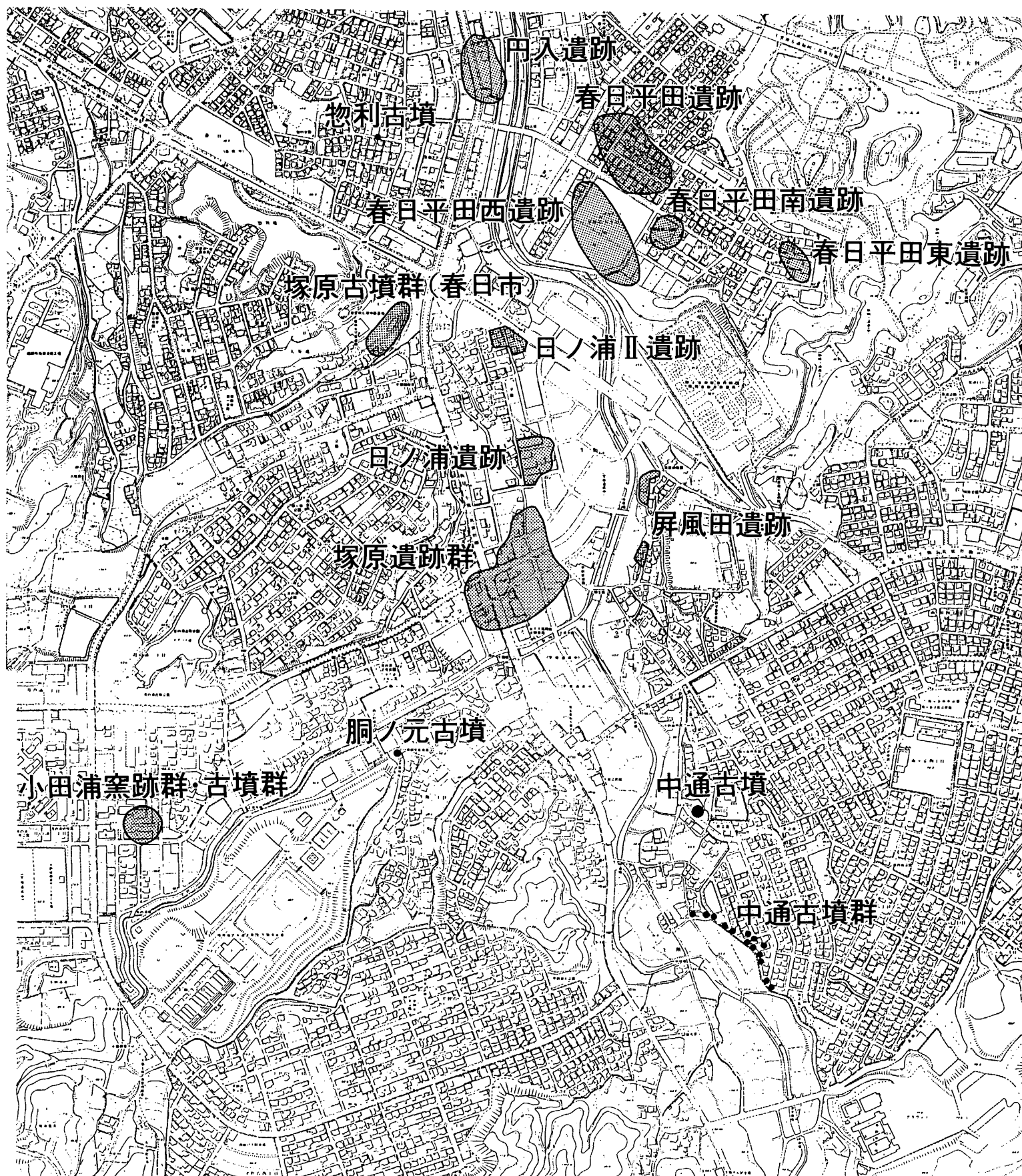
下 村 精 一

表 1 牛頭周辺遺跡地名表

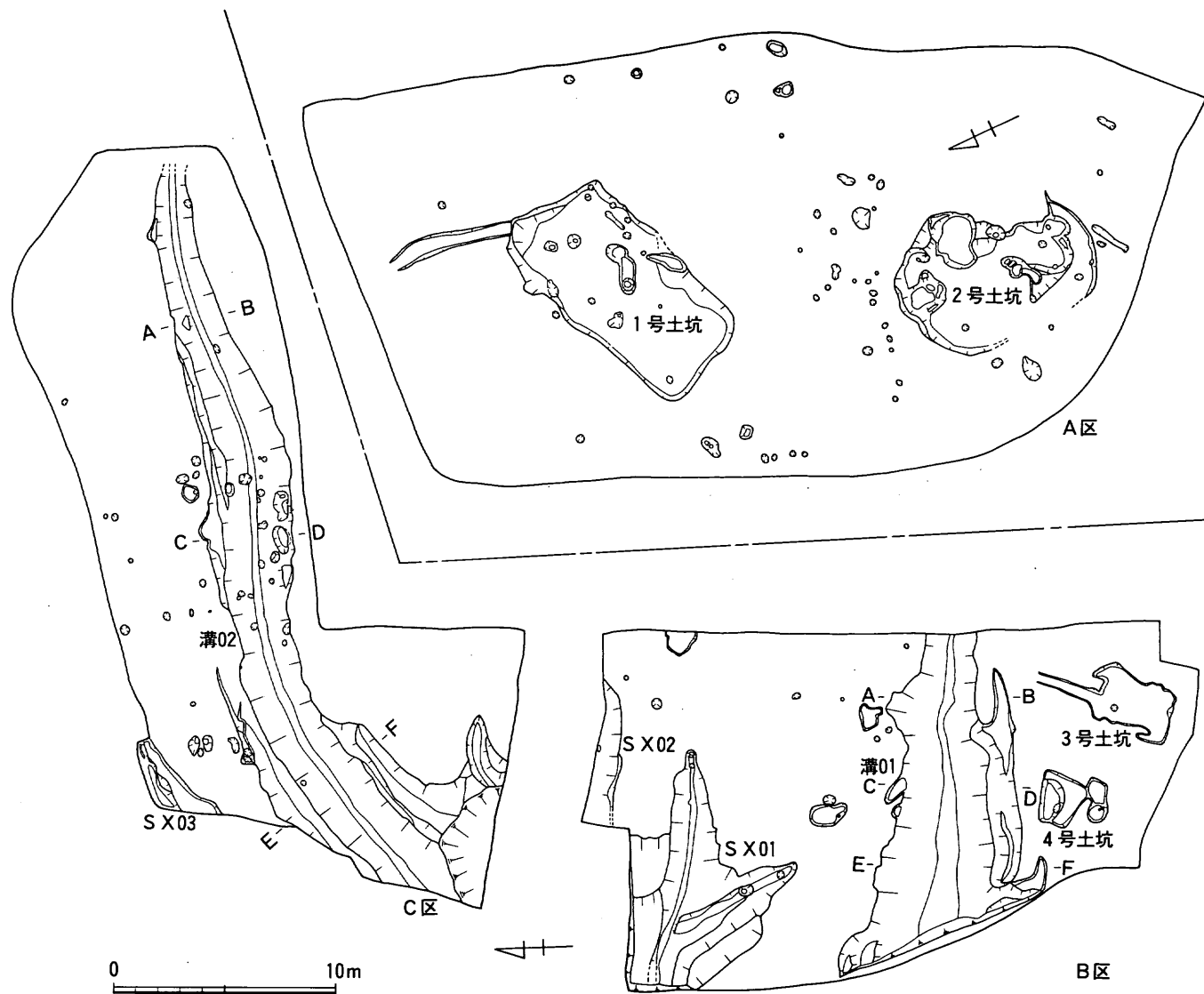
1	天神山古墳群	春日市大字上白水	前方後円墳、円墳	
2	天神山・水城	" "	土塁	(国指定史跡)
3	大土居水城跡	" "	土塁	(国指定史跡)
4	ウトグチ窯跡群	" "	窯跡2基以上	1987春日市教委調査(2基)
5	観音山古墳群	那珂川町大字中原他	前方後円墳・円墳260基以上	1972県教委、那珂川町教委調査
6	西浦古墳群	春日市大字上白水	円墳4基	1981春日市教委調査
7	大牟田池窯跡	" 大字春日	窯跡1基以上	
8	惣利窯跡群	" "	窯跡15基以上	1977～80春日市教委調査(9基)
9	惣利遺跡群	" "	古墳～歴史時代住居跡	1979・80春日市教委調査 縄文～中世
10	向谷遺跡群	春日市大字春日	甕棺・方墳、弥生～歴史時代住居跡	1979～82春日市教委調査
11	春日平田窯跡群	" "	窯跡21基	1982～85春日市教委調査(21基)
12	九州大学 筑紫キャンパス内遺跡	春日市・大野城市	集落、溝等、縄文～奈良	1978～九州大学調査
13	池田・池ノ上遺跡	大野城市大字上大利	土坑2基、土塁	1990大野城教委調査
14	梅頭窯跡	" "	窯跡1基	消滅
15	上園遺跡	" "	住居跡、井戸、弥生～歴史時代	1985～大野城市教委調査
16	出口窯跡	" "	窯跡1基	



第1図 牛頭周辺遺跡分布図(1/25,000)



第2図 位置図 (1/10,000)



第3図 遺構配置図 (1/300)

17	唐 土 遺 跡	大野城市下大利	奈良時代の土器溜め	1989大野城市教委調査
18	谷 川 遺 跡	" "	弥生～古墳時代の溝	1994大野城市教委調査
19	吉 松 古 墳	太宰府市大字吉松	円墳 1 基	
20	水 城	太宰府市・大野城市	土塁	(国指定特別史跡)
21	神 ノ 前 窯 跡 群	太宰府市大字吉松	窯跡 2 基	1978太宰府市教委調査 (2 基)
22	篠 振 窯 跡	" "	窯跡 2 基	1974・85太宰府市教委調査 (2 基)
23	尊 田 窯 跡	" "	窯跡	
24	長 浦 窯 跡	" 大字向佐野	窯跡 1 基	1972福岡県教委調査 (1 基)
25	向 佐 野 窯 跡 群	" "	窯跡 3 基	同上 (3 基)
26	宮 ノ 本 窯 跡 群	" "	窯跡 8 基	1979・84太宰府市教委調査 (8 基)
27	谷 蟹 窯 跡	大野城市大字上大利	窯跡 1 基	消滅
28	上 大 利 水 城	" "	土塁	(国指定特別史跡)
29	野 添 窯 跡 群	" "	窯跡10基以上	1969福岡県教委調査 (2 基) 1986 大野城市教委調査 (3 基)
30	大 浦 窯 跡 群	" 大字牛頸	窯跡 5 基	1968福岡県教委調査 (2 基)
31	平 田 窯 跡 群	" "	窯跡 9 基	1972立正大学調査 (4 基) 1979～81 大野城市教委調査 (4 基)
32	東 浦 窯 跡 群	" "	窯跡 3 基	1968国士館大学調査 (3 基)
33	上 平 田 窯 跡 群	" "	窯跡 4 基	1972福岡県教委調査 (4 基)
34	中 通 窯 跡 群	" "	窯跡12基以上	1979・80県教委・大野城市教委調 査 (6 基)
35	中 通 古 墳 群	" "	円墳19基	1972・73福岡チブサン会調査 (13 基) 1975県教委調査 (1 基) 1979・80県教委・大野城市教委調 査 (5 基)
36	原 窯 跡 群	" "	窯跡 3 基	土取りで灰原の一部を残すのみ
37	ハ セ ム シ 窯 跡	" "	窯跡30基以上	1987・88大谷女子大学・大野城市 教委調査 (15基)
38	井 手 窯 跡 群	" "	窯跡39基以上	1982～86県教委調査 (31基) 1988 大野城市教委調査 (3 基)
39	道 ノ 下 窯 跡 群	" "	窯跡10基以上	1982～86県教委調査 (10基)
40	足 洗 川 窯 跡 群	" "	窯跡 5 基以上	1982～86県教委調査 (4 基)
41	笹 原 窯 跡 群	" "	窯跡 4 基以上	同上 (4 基)

42	長者ヶ原 窯 跡 群	大野城市大字牛頸	窯跡16基	同上（16基）
43	野 口 窯 跡 群	太宰府市大字大佐野	窯跡 2 基以上	
44	円 入 遺 跡	春日市大字春日	古墳時代住居跡	1981春日市教委調査
45	惣 利 古 墳	" "	円墳 1 基	消滅（横穴式石室・須恵器出土）
46	春日平田 遺 跡 群	" "	弥生～歴史時代住居跡、古墳	
47	華 無 尾 窯 跡 群	大野城市大字牛頸	窯跡 2 基	消滅
48	華 無 尾 遺 跡	" "	散布地	旧石器～縄文（ナイフ形石器石鏃等出土）
49	屏 風 田 遺 跡	" 大字上大利	土坑、溝	1988～93大野城市教委調査
50	塚 原 古 墳 群	春日市大字春日	円墳 4 基	前方後円墳 1 基・円墳 2 基か？
51	日 ノ 浦 遺 跡	大野城市大字牛頸	縄文～奈良時代住居跡	1987～90大野城市教委調査
52	畑 ヶ 坂 窯 跡 群	" "	窯跡 3 基	1 基消滅
53	畑 ヶ 坂 古 墳	" "	円墳 1 基	
54	塚 原 遺 跡 群	" "	円墳24基以上 古墳時代・奈良時代住居跡	1987～93大野城市教委調査
55	胴 ノ 元 古 墳	" "	円墳 1 基	1991大野城市教委調査
56	胴 ノ 元 窯 跡 群	" "	窯跡 2 基	
57	城 ノ 山 窯 跡	" "	窯跡 1 基以上	窯本体が空洞で露出している
58	楠 木 遺 跡	春日市大字下白水	甕棺墓	弥生（中期）
59	大 堤 古 墳 群	" 大字上白水	円墳 3 基	（満水時水没）
60	白 水 池 遺 跡	" "	散布地	縄文
61	浦 ノ 原 窯 跡 群	" 大字下白水	窯跡10基以上	1978春日市教委調査（8基）
62	浦 ノ 原 遺 跡	" "	散布地	土師器・須恵器
63	後 田 窯 跡 群	大野城市大字牛頸	窯跡16基以上	1986大野城市教委調査（16基）
64	後 田 古 墳 群	" "	円墳11基	1982・86大野城市教委調査
65	小 田 浦 窯 跡 群	" "	窯跡13基以上	1976立正大学調査（4基）1982～86大野城市教委調査（9基）
66	小 田 浦 古 墳 群	" "	円墳 3 基	1976立正大学調査（1基）1987大野城市教委調査（2基）

67	月ノ浦窯跡群	大野城市大字牛頸	窯跡2基	1982大野城市教委調査(1基)
68	月ノ浦古墳	" "	円墳1基	消滅(横穴式石室)
69	大谷窯跡群	" "	窯跡12基以上	1971国士館大学調査(4基)
70	石坂窯跡群	" "	窯跡20基以上	1983・89・90大野城市教委調査(7基)
71	足洗川遺跡	" "	散布地	旧石器(石刃出土)
72	出口遺跡	" 下大利	弥生～奈良の集落跡	1989大野城市教委調査『出口遺跡』

II. 調査の結果

1. 調査概要

屏風田遺跡は、大野城市大字牛頸1218-4外に所在する。発掘調査は、第3図に示したA区、B区、C区の順で行われた。これらの調査区のうち、B区とC区は殆ど隣接しているが、A区はそこから南に直線距離で約100m離れている。いずれの調査区も、小字名は「屏風田」である。

牛頸川流域には、大小さまざまな丘陵、谷、平野部が複雑な地形を形成している。屏風田遺跡は、牛頸川東岸にあり、小平野部に面した小丘陵の裾部に位置する。したがって、遺跡全体の地形が東から西へ向かって緩く傾斜しており、標高は43.9m～45.2mほどである。全調査区の西側と、C区の南側はすでにカットされており、原地形は全く残っていなかった。また、各調査区自体も削平を受けており、特にA区ではそれが著しかった。

調査の結果、全調査区合わせて、不整土坑3基、土坑4基、溝2条、ピット若干が検出された。時期的には古墳時代のものと近世のものに大別できるが、全体的に遺物の出土量は少なかった。なお、A区、B区、C区を合わせた調査面積は、1,360㎡ほどである。

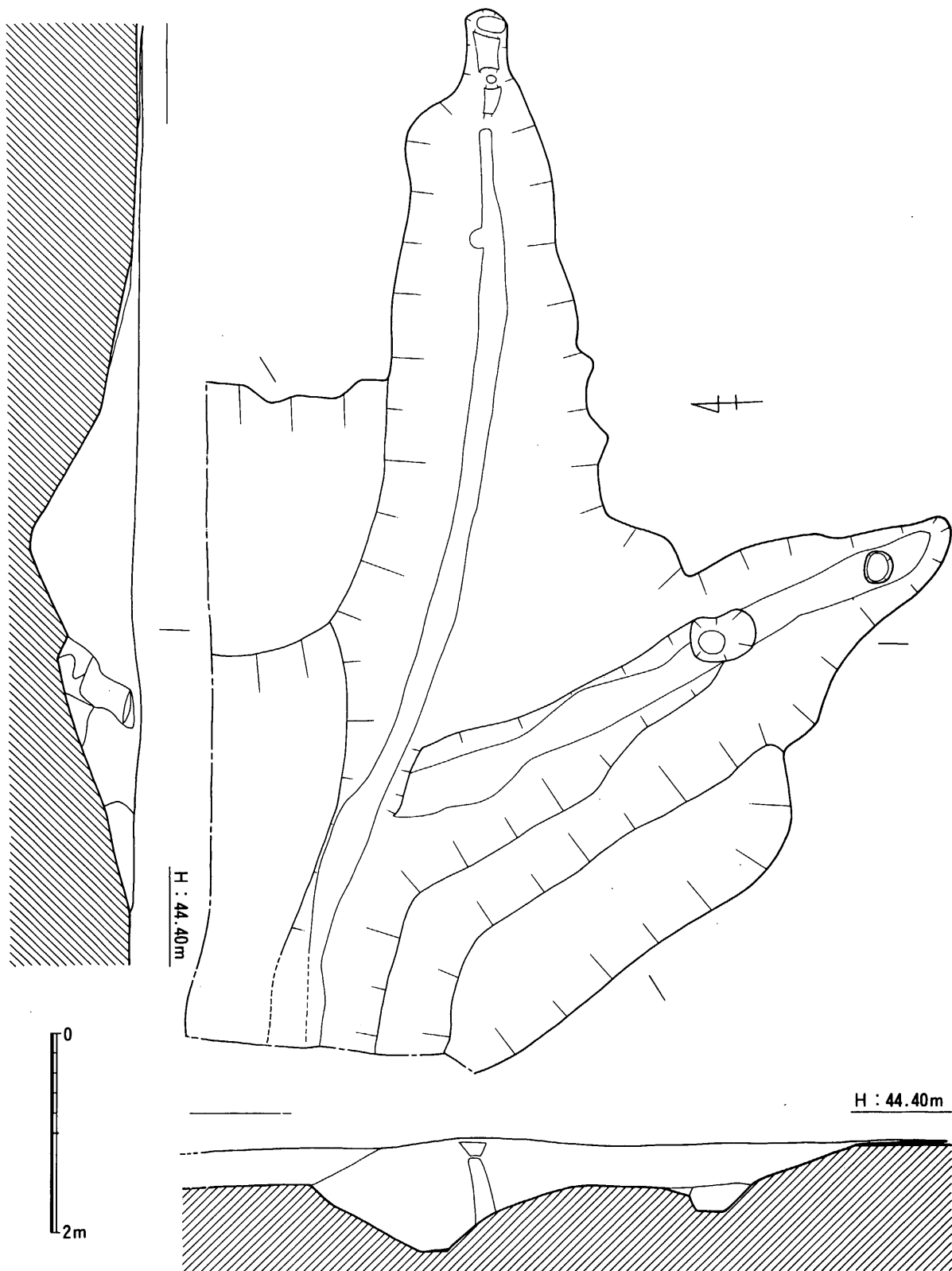
2. 検出遺構と遺物

(1) 不整土坑(SX)

平面形・断面形とも整わないもの、もしくは検出できた範囲が限られており、全容を知ることができないものを不整土坑(SX)とした。

SX01(第4図、図版2)

B区の北西コーナー部で検出された。西から東へ深くなる溝と、南東から北西へ深くなる溝とを合わせたような様相を呈し、上端最大値で東西方向10.6m以上、南北方向7.4m以上である。前述のように、断面が「V」字形と逆台形の溝を2条合わせたような遺構で、全体的には

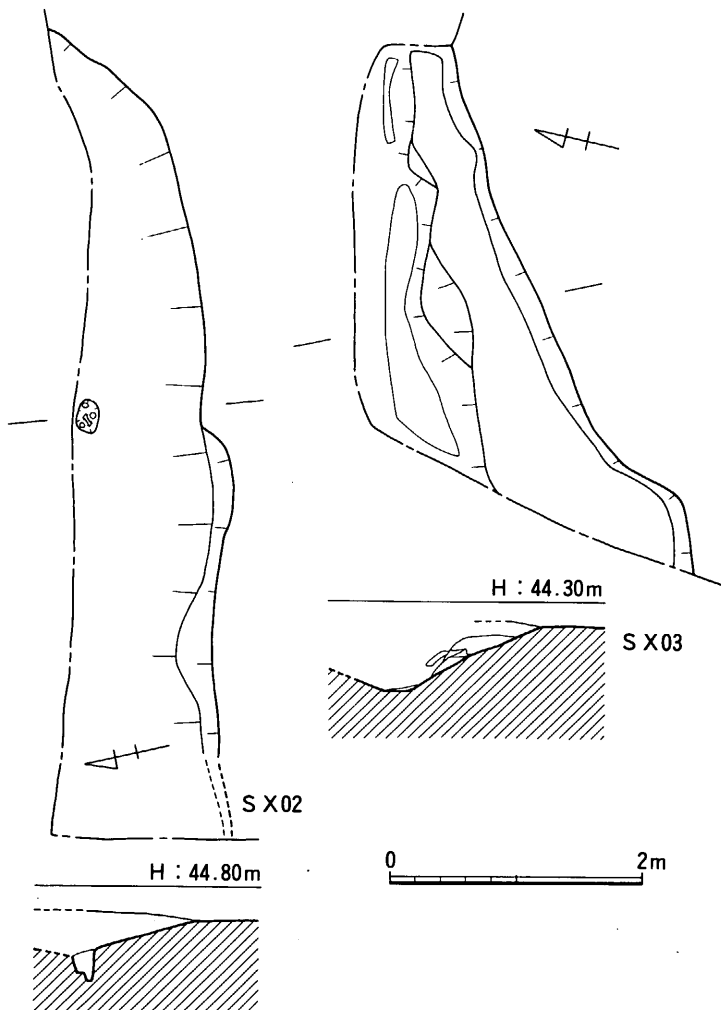


第4図 SX01実測図 (1/60)

南東から北西の方へ寄るほど深さが増している。最も深い部分では1.04mを測る。遺物は、埋土中から須恵器・土師器・青白磁・陶磁器の小片が、ポリ袋（25cm×36cm）1袋分出土したが、いずれも図示することはできなかった。

S X02（第5図、）

B区の北端部で検出された。検出された限りにおいては、東西方向に伸びる溝状の遺構とも思われるが、東端部はやや北寄りに方向を変えて続くようである。上端最大値は、東西方向6.0m以上、南北方向1.3m以上である。断面は、直線的に北側ほど深くなっており、傾斜面でピットが1個検出された。最も深い部分は0.2mを測る。遺物は、埋土中から土師器の小片が5点出土したが、年代を決定するには至らなかった。



第5図 S X02・03実測図 (1/60)

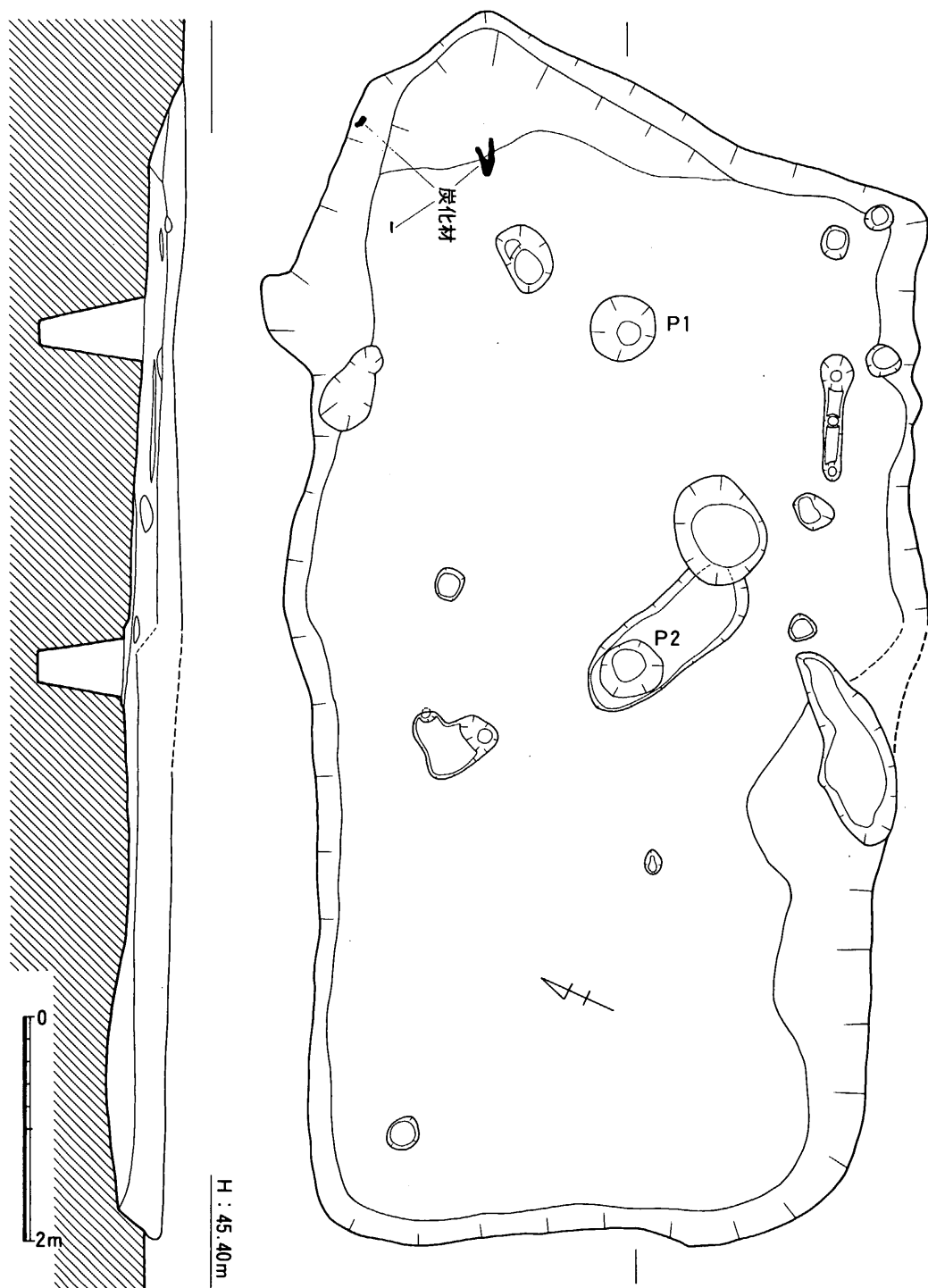
S X03（第5図）

C区の北西コーナーで検出された。検出された限りにおいては、北東から南西方向へ伸び、断面が逆台形を呈する溝状遺構とも思われる。上端最大値は、4.6m以上×1.7m以上である。壁の立ち上がりは緩やかであるが、テラス、段があり複雑である。遺物は、埋土中から須恵器の小片が3点出土したが、年代を決定するには至らなかった。

(2) 土坑

1号土坑（第6図、図版3）

A区の中央からやや北寄りの場所で検出された。東西方向に長い長方形を呈し、上端長軸長10.9m、短軸長4.9mを測る。壁の立ち上がりは南側と東



第6図 1号土坑実測図 (1/60)

側では緩やかであるが、北側と西側では比較的急である。床面は西側に向かって緩やかに傾斜しており、最も深い部分では0.53mを測る。床面からは合わせて16個のピットが検出されたが、それらのうち第6図においてP1、P2としたものは、深さがそれぞれ0.94m、0.77mと他のピットに比較して非常に深い。あるいは何らかの上屋構造を支える柱穴であった可能性も考えられる。遺物は、埋土中より須恵器・土師器・打製石斧の破片・打製石鏃が出土した。その総量は整理箱（40cm×60cm×15cm）で3分の2ほどである。また、北東コーナー付近からは、床面に近い埋土中から若干の炭化材が出土した。

出土遺物（第11図・図版5）

須恵器

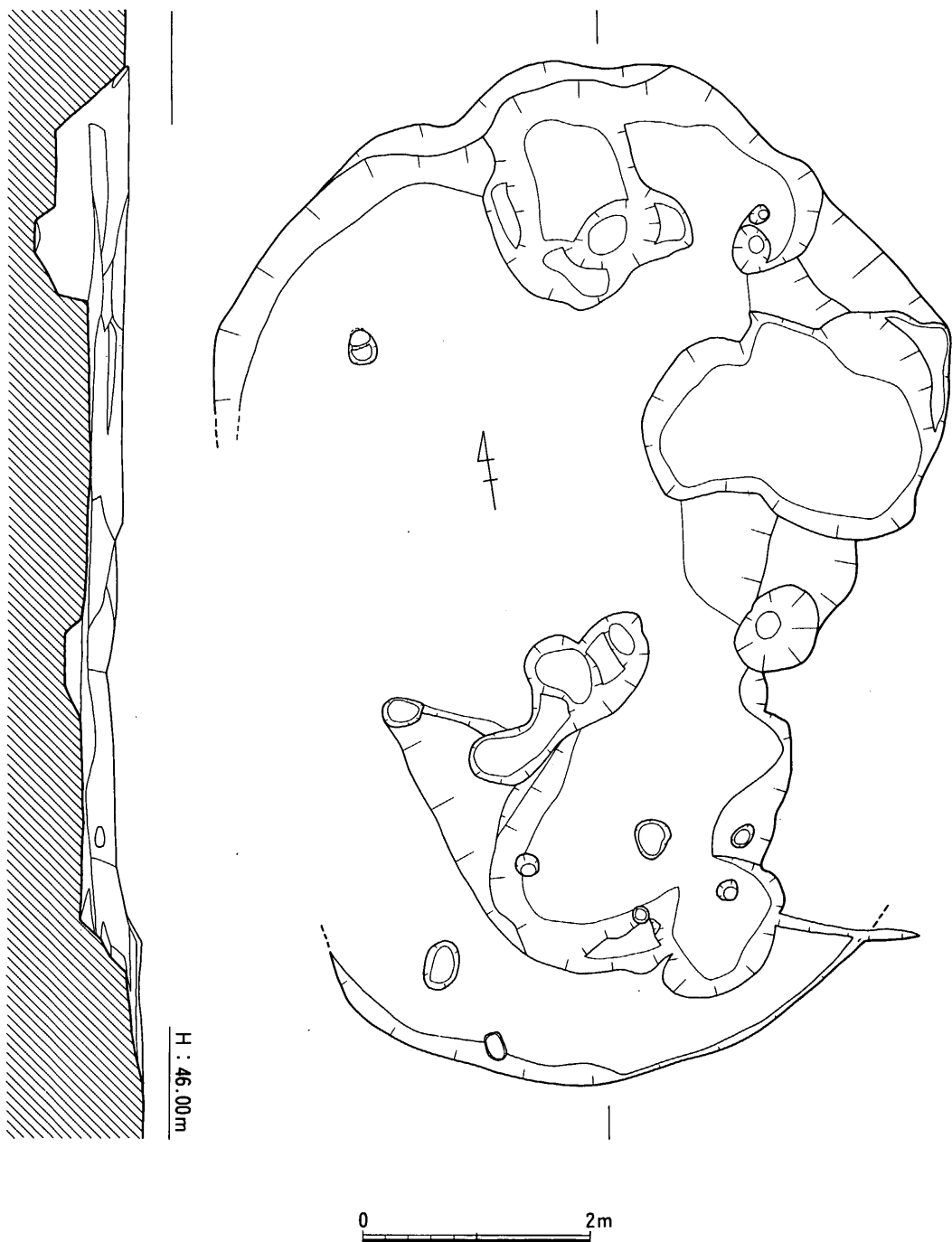
杯蓋（1） 約3分の1の破片を図上復元した。復元口径13.2cm、器高4.9cmを測る。天井部外面に回転ヘラケズリ、体部内外面には回転ナデを施す。天井部内面の調整は灰かぶりのためわからない。焼成は良好であるが、つまみが欠損する。

杯身（2～4） 2・3は高台が付き、4は無高台である。2は焼きひずみが著しいため図上復元した。復元口径12.2cm、器高3.7cmを測る。底部外面はヘラ切り後回転ナデを施す。体部外面は回転ナデ、内面は灰かぶりのため調整不明である。焼成は良好。高台は貼りつけて、畳付に融着の痕跡がある。3は口径13.9cm、器高4.4cmを測る。底部外面にヘラ切り後回転ヘラケズリを施し、他の部分は回転ナデと不定方向のナデで仕上げる。高台は貼りつけて、焼成は不良である。4は復元口径12.2cm、器高3.7cmを測る。底部外面はヘラ切り後ナデ、その他の部分は回転ナデと不定方向のナデで仕上げる。焼成は不良。底部外面にヘラ記号がある。

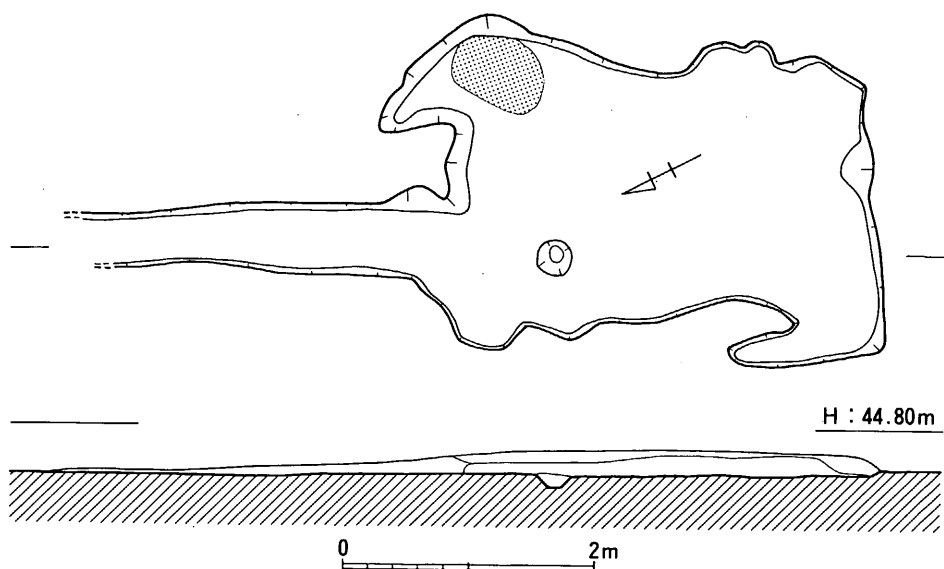
甕（5・6） とともに口縁部から肩部にかけての破片である。5は焼成不良で内外面とも磨滅が激しい。口頸部は内外面とも回転ナデを施す。胴部外面の調整は磨滅のため明確ではないが、平行叩きを加えているものと思われる。胴部内面には同心円状当て具痕が残る。口径20.4cm、残存高8.5cmを測る。6も、口頸部内外面に回転ナデを施す。胴部外面には格子目叩き、内面には同心円状当て具痕が残る。頸部内面にヘラ記号がある。焼成は良好。口径20.8cm、残存高7.9cmを測る。

2号土坑（第7図、図版3）

1号土坑の南側、約7.4mの場所で検出された。南北方向に長く、中央部がつぶれたような楕円形を呈するとも考えられるが、西側壁の大部分が削平されており詳細は不明である。また、東側壁にも、一部削平されたと考えられる部分がある。検出することができた部分に限れば、上端長軸長9.0m、短軸長5.8mを測る。床面は、テラス、段、ピットの多い複雑な様相を呈する部分もあるが、大部分はほぼ平坦である。壁の立ち上がりは、おおむね緩やかである。遺物は、埋土中から須恵器、土師器、黒曜石の小片が、ポリ袋（25cm×36cm）1袋分出土したが、一点を除いて図示することができなかった。



第7図 2号土坑実測図 (1/60)



第8図 3号土坑実測図 (1/60)

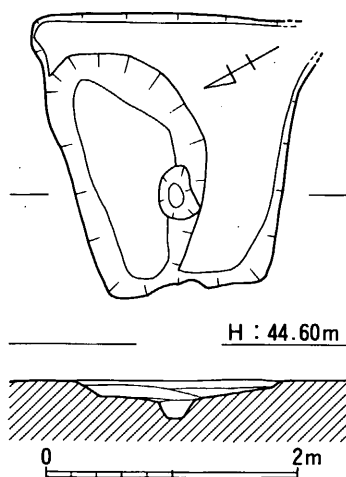
出土遺物 (第11図、図版5)

陶器

甕 (7) 口頸部から胴部にかけての小破片である。復元口径13.9cm、残存高8.5cmを測る。内外面ともに回転ナデ調整を行う。外面の、頸部と胴部の境目には突帯状の隆起が見られる。焼成は良好で、赤灰色を呈する。

3号土坑 (第8図)

B区の南端部付近で検出された。南北方向に長い不整形な平面形を呈し、上端長軸長3.4m、短軸長1.9m、最大深さ0.2mを測る。壁の残りは悪いが、床面で1個のピットを検出した。北側壁で溝と切り合っているが、新旧関係は不明である。遺物は、埋土中から炭化材の小片が3点出土したのみである。



第9図 4号土坑実測図
(1/60)

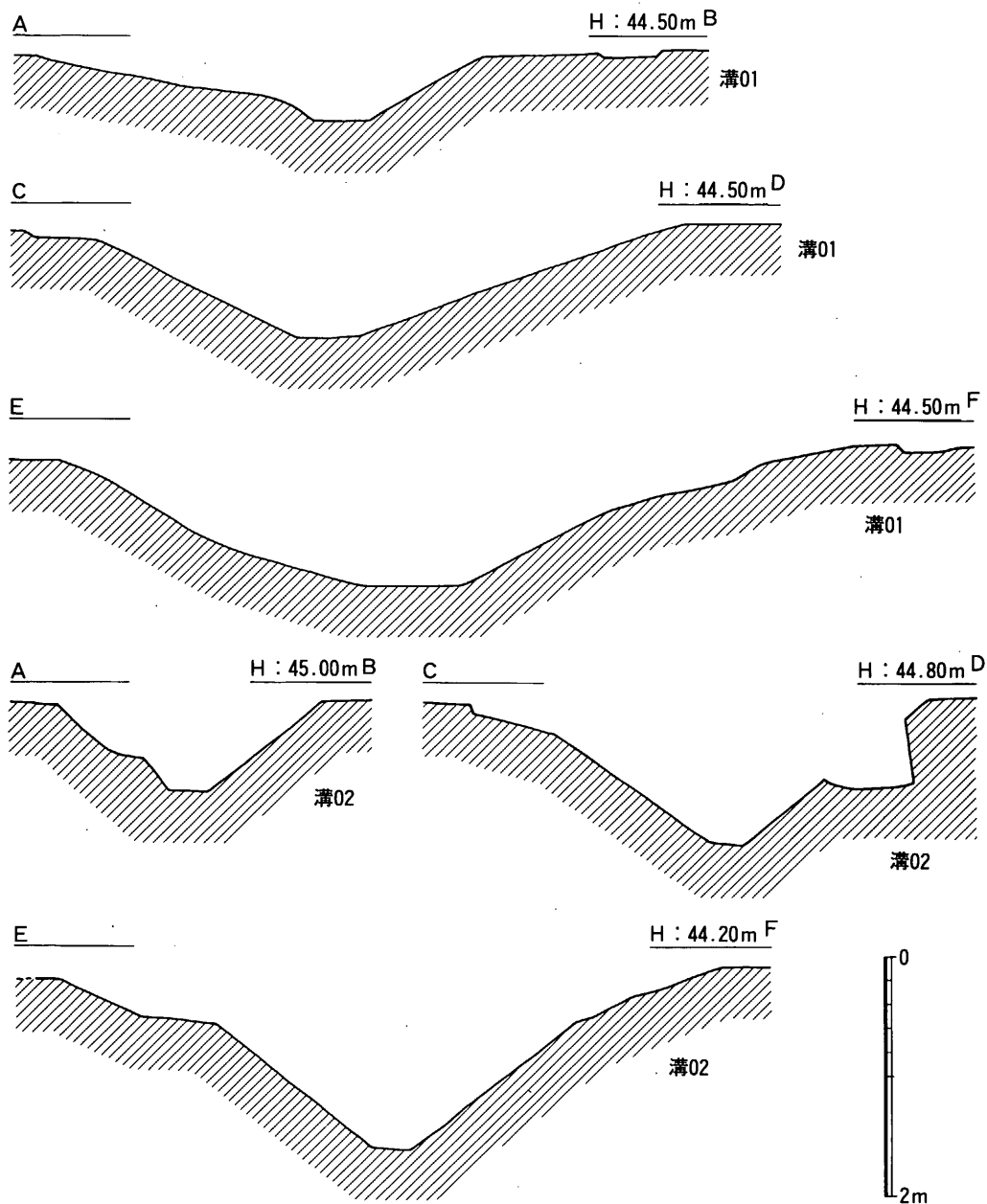
4号土坑 (第9図)

3号土坑の西側、約2.8mの場所で検出された。南側で他の遺構と切り合っているが、この部分を補ってみると、台形に近い形と考えられる。その場合の規模は、上端最大値で2.5m×2.7mとなる。深さは最も深いところで16cmである。床面の北側に浅いくぼみがあり、その部分でさらに1個のピットが検出された。遺物は、埋土中から須恵器、土師器、染付、サヌカイトの石核が、それぞれ一点ずつ出土したのみである。

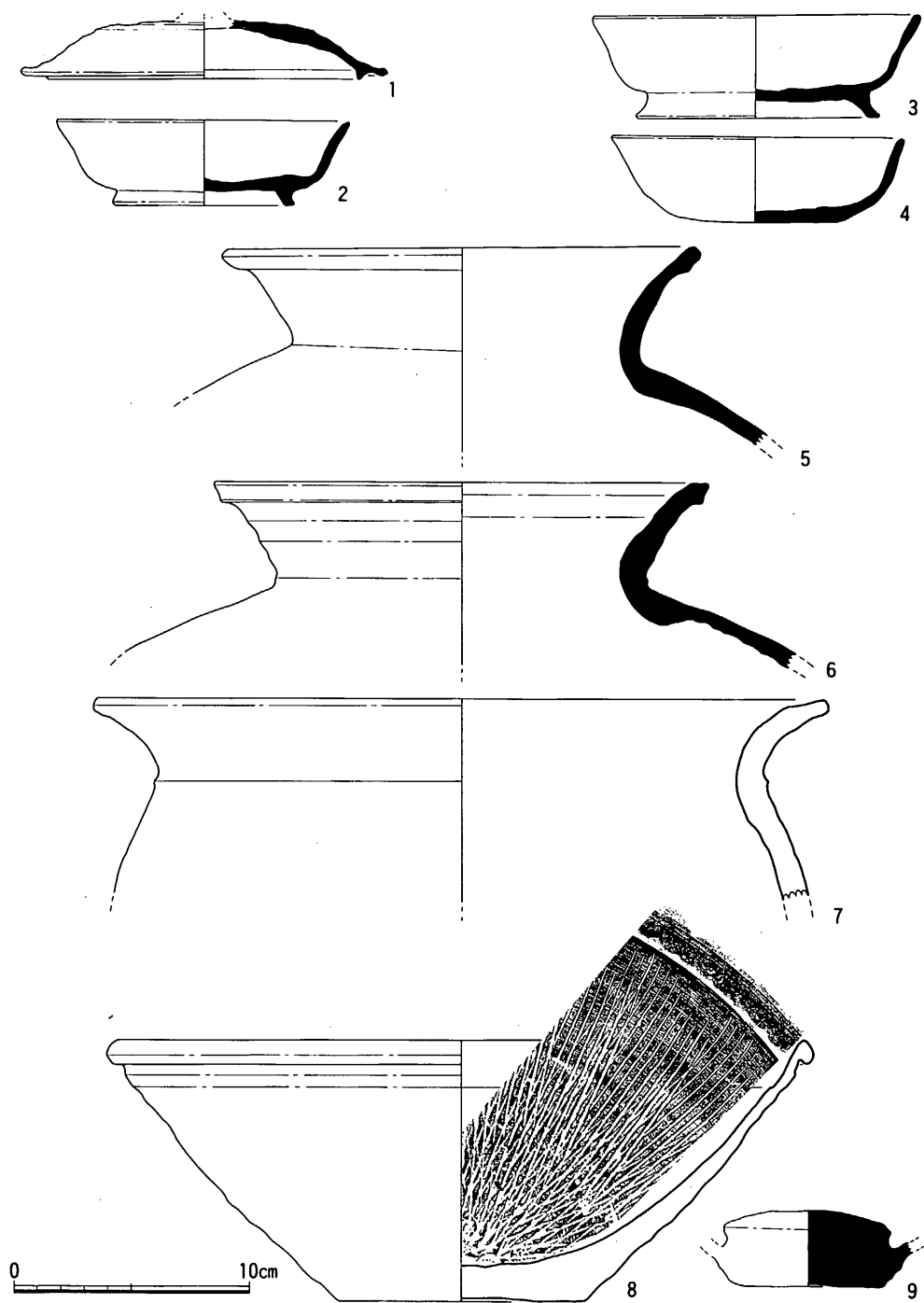
(3) 溝状遺構

溝01 (第3・10図、図版1・4)

B区の中央からやや南寄りを、ほぼ東西方向に横切るようにして検出された。東西両側とも調査区域外へ続く。幅2.3m～9.6m、深さ0.4m～1.3mを計るが、全体的には西側ほど幅が広



第10図 溝01・02断面図 (1/60)



第11図 出土遺物実測図 (1/3)

く、また深い。上端には不規則な凸凹が多く見られる。下端はやや蛇行するものの、上端ほど不規則ではない。断面形は逆台形を呈し、壁の立ち上がりはおおむね緩やかである。南側の壁にはテラス、段が多く、やや複雑である。床面はほぼ平坦である。遺物は、埋土中から須恵器、土師器、白磁、陶磁器などが、ポリ袋（25cm×36cm）3分の1袋分出土したが、いずれも小片のため図示することができなかった。

溝02（第3・10図、図版2・4）

C区は、小さく「L」字状に屈曲する調査区であるが、そのほぼ中央を、調査区の形状に沿うように走る溝である。検出長約34m、幅1.1m～8.8m、深さ0.4m～1.8mを測る。上端の幅は、調査区の東端部で最も狭く、調査区中央部へ近づくと徐々に広がる。その後南西方向に弧を描く直前に一旦狭まり、そこからは急激に広がる。これに対して、下端の幅は0.2m～0.5mと、上端と比べると一定しており、ほぼ平坦である。深さは、西の方ほど深い。断面形は逆「V」字形を呈し、壁の立ち上がりは傾斜40°前後とやや急である。調査区中央部付近の、幅が一旦広がる部分では壁に多数のピットが見られ、また南西端部付近ではテラス、段が多い。遺物は、埋土中から須恵器、土師器、青磁、白磁、陶磁器などが、整理箱（40cm×60cm×15cm）約1箱分出土したが、1点を除いては小片のため図示することができなかった。

出土遺物（第11図、図版5）

陶器

摺鉢（8） 復元口径29.1cm、器高11.2cmを測る。片口部は残っていない。13条一単位の摺目は底部にまで施されており、焼成も良好でやや赤味がかかったチョコレート色を呈する。底部は糸切りである。

（4） その他の遺物（第11図、図版5）

須恵器

円面硯（9） 調査に先立って行った試掘調査のトレンチから出土した。遺構に伴うものではない。器高3.2cmを測る。陸部と海部は明瞭に分かれるが、外堤部端部を欠損している。底部外面をヘラ切り後ナデ、その他の部分を回転ナデとナデで仕上げる。同様の遺物が日ノ浦遺跡から出土しているが、それに比べると作りが粗い。

＜註1＞ 『牛頭日ノ浦遺跡群』大野城市教育委員会 1994

III. ま と め

屏風田遺跡の調査結果は前述のとおりである。以下に各遺構の時期について簡単にふれ、まとめたい。

SX01

出土遺物の殆どは須恵器、土師器の小片であるが、それらとともに出土した陶磁器の中には

18世紀初頭にまで下るものがある。両者の時期差は大きい、遺物出土状況に差異は認められなかった。したがってここでは、本遺構は最終的には18世紀初頭に埋没したものと考えておきたい。

S X02、S X03

ともに出土遺物が非常に少なく、それらからだけでは時期を決定できなかった。

1号土坑

第11図1～4の須恵器蓋杯は、いずれもⅥ期に属するものである。すなわち、本遺構の時期は7世紀後半と考えられる。

2号土坑

第11図7の甕は、床面のピットの埋土中から出土したもので、時期的には中世に属するものである。このような出土状況と、他の出土遺物がすべて小片であることから、本遺構の時期は中世と考えられる。

3号土坑

出土遺物は炭化材の小片のみであり、時期を決定することはできなかった。

4号土坑

出土した染付は18世紀後半のものであり、本遺構の時期もそのように考えられる。

溝01

出土遺物の殆どは須恵器、土師器の小片であるが、それらとともに出土した陶磁器の中には18世紀後半にまで下るものがある。両者の時期差は大きい、前述のS X01の場合と同様に、出土状況に差異は認められなかった。したがって、本遺構についても最終的には18世紀後半に埋没したものと考えたい。

溝02

出土遺物の殆どは須恵器、土師器の小片であるが、第11図8に図示した遺物は17世紀後半の肥前系摺鉢である。これらの他にも、時期的には13世紀代から18世紀初頭に及ぶ陶磁器が出土している。したがって、やはり本遺構についても最終的な埋没時期は18世紀初頭と考えておきたい。

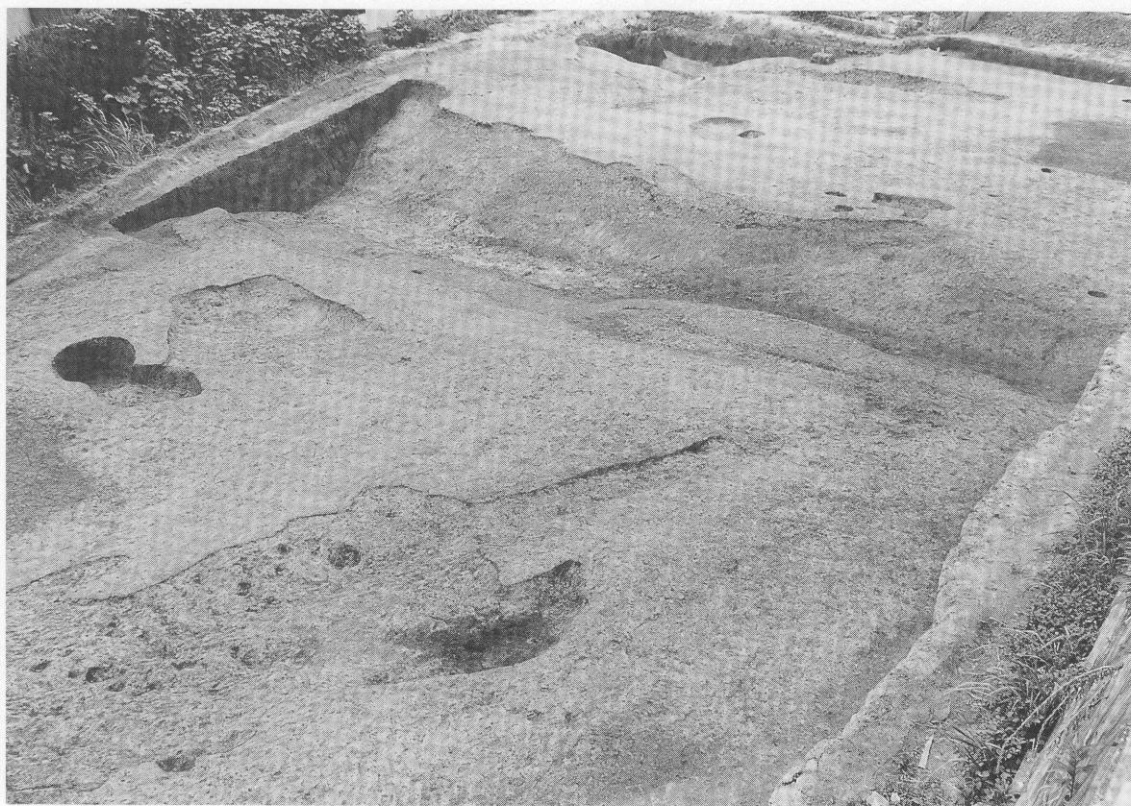
以上のように、今回の調査では中・近世に属すると考えられる遺構が4基検出された。また出土した陶磁器には国産のものと輸入品とがあり、時期的には13世紀代から18世紀後半にまで及んでいる。これらの発見は牛頸地区では初めてのことであり、今後同地区で中・近世のより明確な遺構が検出される可能性が出てきた。

本稿をまとめるに際して、太宰府市教育委員会山本信夫氏、九州陶磁文化館大橋康二氏、たましん歴史・美術館中沢富士雄氏には有益な御教示を賜った。厚く御礼を申し上げる。また、末筆ながら、現地調査ならびに整理作業に御協力頂いた皆様方に、心より御礼を申し上げる。

版 图



(1) A区全景



(2) B区全景



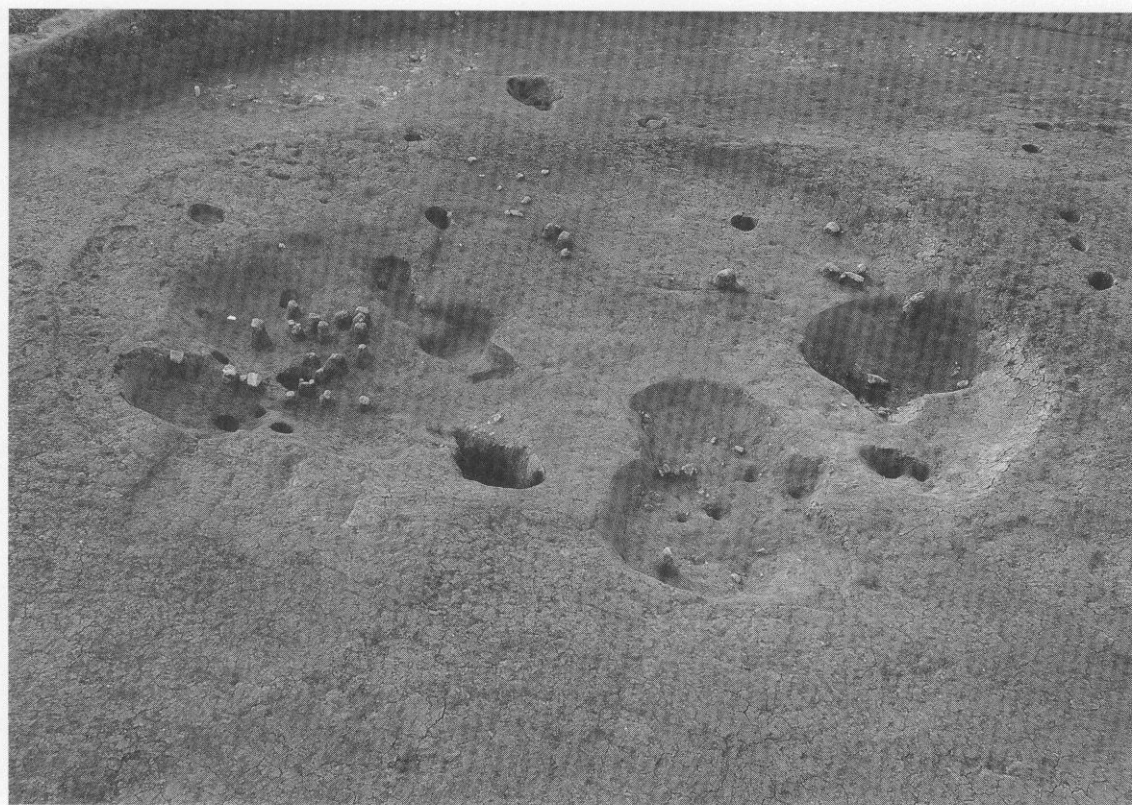
(1) C区全景



(2) SX01



(1) 1号土坑



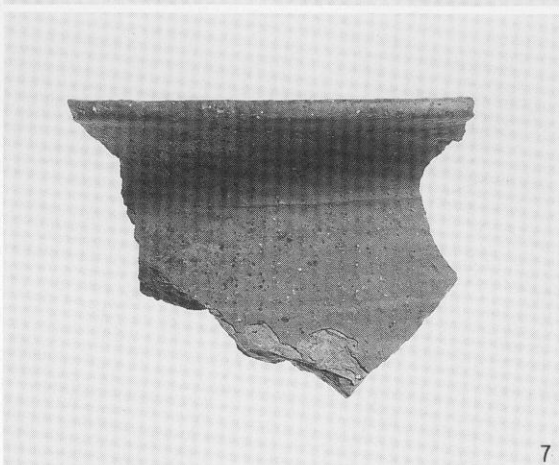
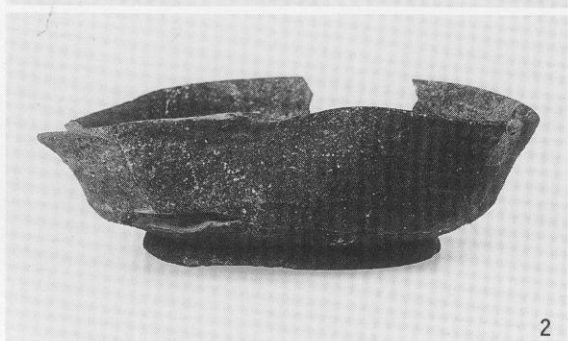
(2) 2号土坑



(1) 溝 01



(2) 溝 02



報 告 書 抄 録

ふ り が な	うしくびびょうぶたいせき							
書 名	牛頸屏風田遺跡							
副 書 名	倉石土地区画整理地内埋蔵文化財調査報告書							
巻 次	2							
シ リ ー ズ 名	大野城市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第46集							
編 著 者 名	徳本洋一							
編 集 機 関	大野城市教育委員会							
所 在 地	〒816 福岡県大野城市曙町 2 - 2 - 1 TEL 092-501-2211							
発 行 年 月 日	西暦 1995年 12月 25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村 遺跡番号		北 緯 ° , ' "	東 経 ° , ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
びょうぶ 屏 風 田	ふくおかけん 福岡県 おおのじょうし 大野城市 おおあざうしくび 大字牛頸			33°30'04"	130°28'32"	1992 07 09 ∩ 1993 08 27	1,360㎡	区画整理 事 業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な 遺 構		主 な 遺 物		特 記 事 項	
屏 風 田	集落	古 墳 中 世 近 世	不整土坑 土坑 溝		須恵器、土師器 陶器、磁器		古墳時代と中世、近 世の複合遺跡	

大野城市文化財調査報告書

第 46 集

平成 7 年 12 月 25 日

発 行 大野城市教育委員会
福岡県大野城市曙町二丁目 2-1

印 刷 陽 明 印 刷 企 業 組 合
福岡県春日市春日公園一丁目 3

